


カナダ・トロントLGBTコミュニティ報告ー多様性の街に暮らす

GI-FRONT関西 塩安九十九さん

カナダってどんな国？



私は2014年4月からカナダ・トロントに住んでいます。トロントは人口規模が大阪と同じくらい、白人の割合は約8割で、都市部では半分以下だそうです。公用語が英語とフランス語のため、すべて二か国語併記され、移民も多く、いろいろな言語が飛び交っています。

街は緑が豊かです。労働時間は日本より短く、友達や家族と過ごす時間が十分あります。おおらかで、人生を楽しむ雰囲気が感じられます。でも合理的な一面もあって、意見がたたくさん出る会議でも時間が来ればさっと終わります。

移動手段は地下鉄とバス、路面電車です。車いすが利用できる駅は半分程度で、代わりに予約制の車いす専用バスが自宅から目的地まで連れて行ってくれます。様々な分野で女性が活躍していて、テレビで専門家が議論する場でもメンバーの半分は女性です。町に出

るとホームレスの人を結構見かけますが、教会や福祉施設がサポートをしています。ろうの人が運営するレストランで注文する時は客も手話を使います。LGBTQ向けの広告や、LGBTQによって建てられたLGBTQのための劇場、レインボーシールが貼ってあるLGBTQフレンドリーなお店もたくさんあります。

トロントの主なLGBTQシーン

LGBTQはLesbian (レズビアン)、Gay (ゲイ)、Bisexual (バイセクシャル)、Transgender (トランスジェンダー)、Intersex (インターセックス)、Questioning (クエスチヨニング) またはQueer (クイア) の略称です。LGBは性指向で自分がどんな性の人に魅力を感じるか、Tは性自認で自分がどの性と自覚しているかに関わります。Qは自分の性を明確にしたいくない、あいまいに感じている場合に使います。

LGBTQフレンドリーな都市として有名なトロントでは、5月末にLGBTQ映画祭が行われます。今年上映された70作品の中には家族向けの作品もあり、子ども達が「多様でいいんだよ」というメッセージのアニメを観ていました。LGBTQ最大のイベント、

プライドパレードがある6月の10日間はプライドウィークといってイベントが目白押しになります。大小さまざまな美術館ではLGBTQのアーティストの企画展やイベントが行われ、いろいろな学会や会議も開かれます。LGBはもう一般サービスの対応内に入っていて、今はトランスが課題のようです。今年の学会では特に男性から女性になった人の就職困難が大きなテーマになっていました。ろうでLGBTQの人の活発な活動報告もありました。

最も有名なLGBTQのメディア、『エクストラ』は元々週刊新聞でしたが、現在はウェブサイトで政治や文化、LGBTQに関わるイベント、サポート、ビジネスなどの情報を発信しています。一般のメディアの中でLGBTQの話題が出てくるのも当たり前になっているようです。LGBTQフレンドリーな教会も多く、中でも有名なストロポリタン・コミュニティー教会の日曜日のミサはネット中継していますので、日本からもご覧いただけます。

LGBTQコミュニティ

30年以上前からLGBTQの活動拠点になっている519チャーチストリートコミュニティセンターはカフェも併設されている大きなセンターで、LGBTQ関連の情報提供やたくさんの事業が行われています。政府からの助成金と寄付金で運営されていて、プライドウィークに開催する大きなデイスコ・プログラムの際には、6日間で3000万円以上の寄付が集まるそうです。トロント大学にはLGBTQの歴史的資料を保管するアーカイブスセンターや、大学生でなくても利用できる女性とトランスのためのセンターがあります。ここでは緊急時の融資なども相談できます。

ホームレスと移民、LGBTQのカテゴリーを専門的に扱う医療施設では、無料健康相談バスの派遣やLGBTQで親である人のネットワーク構築、若者のためのプログラム等を開催しています。トランスの人が性別移行を始める時の相談窓口があり、独自のケア・ガイドラインも作成しています。他にも教育現場改革のための教員研修や若いLGBTQのホームレス支援センターを政府予算で運営する団体もあれば、週1回、トランスの人専用の相談時間を設けている生活困窮者支援センターもあります。ここでは職探しや労働の際、

オンタリオ州人権法のもと、守られる権利や雇用主の義務、嫌がらせや差別を受けた時の対応なども学びます。しかし実際にはカナダでもトランスの人たちの就職困難や、職場での差別などはいまだに起きています。

これらの活動に共通することで日本と違うことは、ミーティングに食事が出ること。交通費も出る場合もあります。コミュニティにつながるためにおく効果がありそうです。平日の夜にミーティングやイベントをやっているのは働き方が違うためでしょう。参加者のコミュニティへの帰属意識が高いこと。ろうの人がいることが日常になっていて、イベントに手話通訳が付いていること。喫緊の人権課題はトランス。クイアを名乗る人が多いこと。あとLGBTQだけでなく、人種や貧困、薬物、男女差別などの人権課題もあるという基本認識を共有していることで、これはトロントならではのようです。

日常の中の人権

普段から多くの人がLGBTQであることをカミングアウトしているし、社会全体がLGBTQを想定している気がします。それは、多民族国家カナダを作っていく上で人種差

別や女性差別といった課題に取り組まざるを得なかった歴史と関係があるのでしょう。市民権獲得運動の歴史があったからこそ、性の多様性も受け入れられたと思います。

カナダ人が人権感覚を維持し続ける要因は何なのでしょう。活発な議論が行われるTV番組や環境問題・貧困問題をテーマにした番組、CM等の影響。キリスト教を基盤とした慈善事業や寄附文化。政府や企業はNPOの重要性を認識し、常に一定予算を割り当てています。NPOの活動をブラッシュアップして全国に普及させていく姿を見ると、政府が社会資源を最大限に生かそうとしていること、社会福祉の仕組みをしっかりと構築しようとしていることがわかります。

私が通っている大学入学準備の英語クラスのオリエンテーションでも学生の人権は州の人権法に基づいて守られるという説明がありました。留学生の人権感覚はバラバラなので、互いの文化や考えを尊重しようという始めに念を押すことは安心につながります。大学のHPには人権法に基づいたハラスメント防止ポリシーが掲載されています。トイレには性的自認の尊重を呼びかけるポスターが貼ってあるので、使用する時の安心度も全然違います。授業ではあらゆる情報に対して批判的な思考で分析する訓練を行っています。カナダの学

校では一般的のようで、先生は「私が言うことをそのまま信じるのではなく、あなたが考えて判断するように」と説明します。

永住権を持っている人は無料・無期限で英語が学べるなど、その国で生きていくための基礎的な学びを国が保障しています。移民向けの英語の授業では文化や法の仕組み、具体的には裁判の仕組みや警察・弁護士の探し方等を学ぶと共にヘイトクライムやいじめが犯罪であることも教わります。世界中からあらゆる宗教を信仰する人が集まるので、それぞれの文化を尊重しつつ共存するための作法を学ぶのです。

方針とルールの紹介

全員の人権を尊重し、多様性を保障する場所をどのように作っているのか、私が参加した学会や大会、イベントでは共通するルールがありました。まず、参加にあたって土地認識をすることです。カナダは17世紀に英仏の植民地にされた土地であり、多くの先住民の生活や文化が奪われた歴史があります。それが今も先住民の貧困や差別の問題として残っているという大前提を確認・共有します。日本だったら沖縄、北海道で土地認識が、歴史

的経緯では部落問題や在日の問題で認識が共有ができるでしょう。

そしてアクセシビリティの保障です。社会構造によって弱い立場にある人達がいる現実認識と参加者全員を尊重する声明が出ます。手話通訳や車いすでの参加のサポートといった物理的配慮も記載されます。He、she、they、本人が希望する性別代名詞が尊重される、ジェンダーフリートイレが設置されることからトランスへの配慮が現在の課題だとわかります。Theyという代名詞はおもにクイアの人たちが好みます。身体的にも精神的にも様々な人が参加しているので、会場の一角には落ち着くための静かな空間が用意されます。無料の食事も提供されます。

ほかにも無臭での参加、カウンセラーの配備、禁酒／しらふの場所などが共通していました。

誰もが歓迎されていると主催者がアピールすることで多様性のある場が実現し、参加者間の共通認識を確認することで安全性が高まります。また、現在取り組みを強めている分野もわかります。大会の意味を共有することは、個々人の行動に影響して、より具体的な人権尊重の実践や多様性の保障につながるのではないのでしょうか。

参加者の心身の安全を守りつつ、積極的な参加を促していた例ですが、太っている事で被る様々な差別に対抗する、有色人種でLGBTQの人たちのワークショップで「ここは有色人種で太っている人が安心して自分を表現する場所なので白人で痩せている人はなるべく発言を控えてください」と呼びかけていたことが印象的でした。文化的背景が異なるためカミングアウトしにくいアジア系のLGBTQの人たちのワークショップでは、具体的なケースを想定して議論をするために、個人が特定される形で外に漏らさない、話したくなければパスできるなどのグラウンドルールを設定していました。こうした前提を参加者が共有することで安心感を高め、プライバシーやアイデンティティに関わる議論もしやすくなっていると思いました。

プライドパレード

150万人が訪れると言われるトロントのプライドパレード。当日は旋屋橋から心齋橋、横は御堂筋から四つ橋筋くらいの規模で閉鎖され、ストリートフェアや野外ステージが並びます。最寄駅の改札は虹色にデコレーションされ、多くのお店がレインボーフラッグを

掲げてお祝いしていました。今年のメインパレードには250以上の団体や企業が参加したようです。レズビアンをカムアウトしているオンタリオ州の州知事や有名な芸能人の姿も見えました。一方で最近、パレードのスポンサーでもある大手銀行がトランスを理由に銀行口座の使用停止、口座開設拒否といった事件を起こしたことを受け、表向きだけLGBTQフレンドリーにふるまうことは偽善的だ、パレードを宣伝のために使うなと抗議する人たちもいました。

多くのトランス団体がブースを出して活動紹介や情報提供していました。トランス当事者と支援者のマーチには3-4千人が参加し、これだけ多くの人が応援してくれていると思うと、本当に心強いと感じました。

運営ボランティアは約1800人、登録システムも洗練されていて、総合案内、治安維持、環境保全など様々なチームごとに仕事内容をわかりやすく説明する動画が事前に配信されます。ボランティアは無料で食事が届けられるなど自分が丁重にもてなされるので、参加者を丁寧にもてなすことができます。性的思考や性自認の多様性だけでなく、様々な多様性を包括し、誰もが参加しやすいイベントにしようとしている努力が感じられます。

おわりに

移民としてカナダで暮らす友人は人権の話をする日本より先進国で羨ましいと思うかもしれないけれどそれは幻想であり、日本の良いところをせひ生かしてほしいと言っています。歴史や背景は異なっても、基本的人権、生存権、学習権や労働権などについて基礎的な理解を深めて行けばおのずとLGBTQの権利の保障に繋がるのではないのでしょうか。

「制服着ないのは規則違反」ではなく、学ぶ権利があるのにLGBTQに対応しない学校の責任を問える視点、「性転換手術なんて贅沢」という意見に「自分のよりよい生き方のために医療を使うのは正当な権利」と言い切れる自信が欲しい。「少数者のために税金を使うな」という人にも「人権侵害への取り組みは社会や国が責任をもって対応すべき」と堂々と言える方がいい。感情的な道徳論と政治や経済が一緒に語られて人権が守られず、合理的な検証もされない事態は誰のためにもなりません。批判や差別に屈しないためには、人権は相対的に持つものではなく、それぞれに保障されているものだという理解が必要です。日本でも人権が立ち戻るべき基本的な考え方として認識されるようになることを願います。

(2015年7月28日開催)